

ぶん せい そう どう 文 政 騒 動

能柄 男能、きびきび勇壮に、二番目物

ぶんせいさらきそうどう

素材 文政更木騒動(各務原市蘇原野口の農民一揆)

あづみせいうえもん

主題 農民一揆の指導者、二代目安積清右衛門の苦悩と哲学

人物 シテ 二代目安積清右衛門(水衣男出立、着流)

ワキ 魔性の怪(顰出立)

場面 文政十二(1829)年三月二六日の夜、清右衛門の寢所

しんじょ

1 シテ〔次第〕不吉な声に 眠られず。不吉な声に 眠られず。

月を仰げど 目は暗し。

あお めくら

〔名乗り〕これは野口村の庄屋にて 名を清右衛門と申し候。

のぐちむら しょうや

せいう えもん もう そうろう

2 シテ方地謡 重き年貢の その上に、たび重なりし 御用金。

おも ねんぐ

かさ

ごようきん

天領旗本 更木なる、陣屋の沙汰を 断りて、

てんりょうはたもと さらき

じんや さた

ことわ

ここに進退窮まれり。ここに進退窮まれり。

しんたいきわ

こころ やみ

3 ワキ〔名乗り〕これは人の心の闇に住む者にて候。

すがた あわ

4 ワキ方地謡 苦しむ姿を 憐れみて、

こよい

闇より出ずる 今宵なり。

しんたいきわ

わね いのち かね

むなざんよう

進退窮まるその訳は 命と金の 胸算用と見たり。

やみ

いで

きっかい

いでたち

5 シテ 闇より出し その姿、その奇怪な 出立は、

よ

この世のものとも 思われぬ。そなたは一体 何者じゃ。

いったい なにもの

6 ワキ 正気を失う 魂を いざ救わんと 思い立ち、

しょうき

たましい

深い心の 冥府より 罷り来したる 使者なり。

この度は 陣屋の沙汰を 受けるべし 命に勝る 宝は在らず。

7 シテ 闇に聞こゆる その音は、実のごとく 響けども、

損か得かで 惑わされ 道に背ける 心地せり。

8 シテ 謠 損得超えた その先に 姿かたちは 見えねども、

ただ光明に 包まれし 畏き方が 御座します。

9 ワキ それは迷いと 言うものじゃ。 訳の分からぬ ものよりも。

確かなものを 求めるが、知恵ある者と 言うものぞ。

10 ワキ 謠 熊田の衆を見るがよい。御用金を 納めれば、

江戸へ越訴の 費用より 安い金子で 済んだうえ、

さらに手柄を みとめられ、軒の庇も 許されて、

やがて苗字も 名乗れよう。

11 シテ 富や名誉や 褒美より 尊きものが 御座します。

12 シテ 謠 高き日輪 明々と、天道様が 見てござる。

筋の通らぬ 御用金、ここで納めて よいものか。

13 ワキ 熊田の上にも 日輪は なお明々と 輝けり。

14 ワキ 謠 意地をはり、民百姓を 巻き込みて、

愚かなことを 図るでない。 庄屋の役を 賜りし

お上の恩に 感謝して 御苦しみを 忖度し、

黒を白とも 言い含め、お助けするが 筋と知れ。

15 シテ お上のご恩 畏みて 百姓を 説き伏せる。

16 シテ 謠 これが最後と 宥めては 年貢の上の 御用金。

無理を承知で 賺しとる。 度重なりし 理不尽に、

心の痛む 日々なれば お獅子様にも 恥ずかしく、
庄屋の役を 返上し 隠れて生きて まいります。

17 ワキ 庄屋の役を 返上し、事が済むとは 浅はかぞ。
更木屋敷を 悔るな！

18 ワキ謡 地方巧者の その責めは 六身眷属 打ち揃い
のべ 野辺に骸を 晒すまで 止まることなく 続くなり。

19 シテ この現身は 朽ちるとも 法身の光輪 際もなく
世の盲冥を 照らすなり。

20 ワキ 実に浅はかぞ 浅はかぞ。

21 ワキ謡 神や仏は 作り物、人の心が 生みしもの。
己の都合で 拵えて、己を騙し 慰める。

頼みとするは 愚かしく、畏むことの 浅ましき。

22 シテ 神や仏が 無いならば 誰が世界を 作りしか。

23 シテ謡 大地を固め 生を成し 天に星辰 散りばめて
時を動かし 四季をなす。何の所業と 申すのか。

24 ワキ 天地自然の 所業なり。誰も成さねば 何も無い。

25 ワキ謡 神も仏も 方便で 己が心の 生みしもの。
如何様にも 拵えて、己が責めから 逃げるため、

祀り上げたる 隠れ蓑。

26 シテ 語るに落ちる その言葉、魔性のわざと 見切りたり。

27 ワキ 魔性のわざと 呼ぶもよし。 空蝉と呼ぶ この世には、
確かなものは 何もない。

28 ワキ謡 飯沼本家を見るがよい。 飢饉の度に 没落し、

恩を受けし 村人が 蕨採りたる 娘子に
石を投げたる 始末なり。人の心は 薄情よ。

29 シテ 飢饉には 米を分かちて 請判し、民を救いし
その恩を 人はときには 忘るれど…、

30 シテ謡 海より深き その恩と 天より高き 志。
固くこの地に 根ざしたり。

31 ワキ 固き大地と 申せども 空の台に 乗りし物。

32 ワキ謡 天の果てしは 何処にある。時の初めは何時にある。
過去も未来も 無かりけり。ただ在りけるは 今のみぞ。

人は独りで 今ここに 無意味に生を送るのみ。

33 シテ 無意味に送る 生なれば、誰に義理立て するべきか。

34 シテ謡 神も仏も 無いならば 己を縛る 枷もない。
枷が無ければ 自由なり。己の意のまま 生きるのみ。

35 ワキ それが分かれば それでよい。

36 ワキ謡 お上の力に お縋りし 生きてゆくなら 幸せに
命を立つる 道がある。お上の命に 逆らいて

一揆騒動 起こすなら やがて地獄に 落ちるべし。

37 シテ 幸せなどと この世には 在らざるものを 求むゆえ。
人は不幸に 成り果てる。

38 シテ謡 すでにこの世は 地獄なり、苦しむために

生まれ来て、死に行くために 生きるなり。今さら何を
執着し、悩み苦しむ ことやある。

39 ワキ 訳のわからぬ 世迷言…。苦しむことが 楽であり、

死に行くことが 生きるとは、矛盾だらけの 論理なり。

40 シテ 矛盾なり。まさにこの世は 矛盾なり。

41 シテ 謠 矛盾を超えた その先に 幽玄として 現れる。

真如の影を見つれたり。わが身を燃やす 燈明で

道を照らして 進むとき、法身の光輪 際もなく、

世の盲冥を 照らすなり。

42 ワキ 愚かなことを 言うでない。

43 ワキ 謠 陣屋の力を 侮るな。地方巧者は 無慈悲なり。

惣佐衛門の 呼び出しに 断り状を 送るとは

お上を舐めた その所業。酷い仕打ちを 受けるぞよ。

十手・捕縄 手鎖で 惣佐衛門が 乗り出せば

ここに進退 窮まれり。

44 シテ ここに進退 極まれば 宿場の助郷 打ち捨てて

野口明神 境内に 野口の衆を とりまとめ

古市場へと逃げ散ろう。

45 ワキ 地方巧者の 五寸釘 怒り狂いて 村々の、

戸板打ちたる 音がする。実に恐ろしき 響かな。

46 シテ げに恐ろしき響なり。もはや猶予は なかりけり。

47 シテ 謠 須衛の庄屋の 左衛門殿に 越訴の手筈を 相談し、

野口村の 金左衛門 同じく兼蔵 久兵衛と

島崎村の 儀助殿 彦作殿が 意を決し

直訴・駕籠訴を 致すべし。

48 ワキ 直訴・駕籠訴は 重い罪。

49 ワキ謡 訴え出たる 者どもは 江戸屋敷に 送られて、
惨い拷問 受けるべし。

50 シテ そうはさせじと 先回り。

51 シテ謡 磐城平と 寺社奉行

小普請頭を 動かして 主計に咎め 下すべし。

義民の人脈が 今生きて、 危機を乗り越え

闇は晴れ、 越訴の計が 功を成す。

至誠の道は 前知する。 五人揃いて 生きたまま

江戸から帰る その姿、 今鮮やかに 目に浮かぶ。

寝仏山の その下の 伊木の渡しの 船の上、

生きる苦勞の 權ありて 波も静かに 影写し

涼しき風が 吹きにけり。

53 シテ 闇に蠢き 徒を成す 魔性の正体 見切りたり！

54 ワキ おおむおお、名を呼ばれるれば 仕方なし。

55 全員謡 魔性の者は 退散し 心の闇は 晴れにけり。

非道の力に 屈せずに、 弱きものを 慈しみ

天道様を 仰ぐなら、 民の心は 一つにて、

正しき道が 拓かれる。

一揆とは たった一つの 揆。

円を描いて 天道は 狂うことなく 廻りくる。

その真ん中に 人が立ち 志を 貫けば

神通力が 備わりて 天のご加護が そこにある。

そはらのぐち
蘇原野口に 伝わりし、
お獅子様ししさまの 教えおしなり。

なむのぐちだいみょうじん
南無野口大明神

時は文政 如月きげいちげいの 冷たき夜は 明けにけり。

完

てらだ どういち
寺田 藤一 伝
てらだ せいち
寺田 誠知 記